

日本旧石器学会  
ニュースレター 第28号  
NEWS LETTER No. 28  
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



第7回アジア旧石器協会韓国大会

小原俊行（群馬県教育委員会）

第7回アジア旧石器協会韓国大会が2014年11月12日～16日に韓国の忠清南道公州(Gongju)市において開催された。公州市は三国時代の百済の首都であるとともに、1964年に韓国国内で初めて発掘調査された旧石器時代遺跡である石壯里(Seokjangni)遺跡が所在する都市である。本大会は市内にある公州大学新館キャンパスの百済教育文化館にて行われた。

11月12日に市内に到着した後、13日の午前にはオープニングセレモニーと記念講演、基調講演が行われた。その後、「東アジアの旧石器における諸変異性－共通性と相違－」というテーマの下、2日間にわたって各セッションで研究発表が行われた。また、15日にはエクスカージョンが組まれ、臨津江－漢難江流域の旧石器時代遺跡と全谷里(Cheongokni)遺跡博物館を訪問した。16日に、エクスカージョン後に移動したソウル大学校内のホテルにて解散となった。

**記念講演** 記念講演はChoi Bok-Kyu氏、Park Hi-Hyun氏、Choi Myoung-Jin氏が行った。Choi Bok-Kyu氏の講演は石壯里遺跡の発見に至る経緯と発掘調査の概要、韓国における旧石器時代研究のその後の展開に関するものであった。Park Hi-Hyun氏は石壯里遺跡周辺地域で実施された発掘及び遺跡分布調査について説明し、これらの調査から石壯里遺跡周辺には複数の旧石器時代遺跡が存在することが確認された旨を発表した。Choi Myoung-Jin氏は石壯里遺跡に併設されている博物館の活動内容を報告し、遺跡の保護を促進するためには活用による社会への周知活動が重要である旨を指摘した。

**基調講演** 基調講演はClark Geoffrey.A氏が行った。氏は旧石器考古学と古人類学が進化論的生態学を概念的枠組みとして共有しているにも関わらず、方法的な乖離から時として結論に食い違いが生じること、特に情報量の少ない東アジアではこの傾向が顕著で

ある点を説明した。また、東アジアの考古学的古人類学的遺物の傾向を概観し、西アジアやアフリカでの傾向とは重要な差異性があることを、情報喪失に関する確率モデルなどの観点から説明した。これらのことから、東アジアの旧石器時代の様相は新進化論主義などの従来のモデルの範疇内では理解が困難であるため、新出資料の蓄積だけでなく、全体を俯瞰する理論的枠組みの構築が必要である旨を指摘した。

**研究発表** 各セッションは1「最初期の「現代人」の行動」、2「東アジアのハンドアックス」、3「南及び東南アジアでの最新事例」、4「石器製作技術」、5「中央及び北西アジアでの最新事例」、6「シベリア及び日本での最新事例」、7「中国及び韓国での最新事例」、8「黒曜石及びその他石器石材について」というテーマで組まれ、本会場と第2会場の2つに分かれて同時進行にて開催された。発表本数は総計で62本であった。

研究発表を行った日本人は各セッションの発表者順に海部陽介氏、野口淳氏、加藤真二氏、中沢祐一氏、高倉純氏、西秋良宏氏、菊池強一・黒田篤史氏、佐川正敏氏、小野昭氏、佐藤宏之氏、出穂雅実氏、阿子島香氏、大谷薫氏であった。

セッションの間には各日小規模なエクスカージョンが組まれ、宋山里(Songsan-ri)古墳群・武寧王陵、

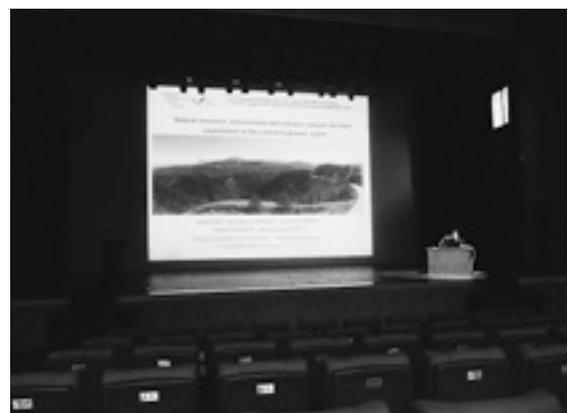


写真1 発表の様子（本会場）

国立公州博物館、石壯里遺跡博物館を訪れた。

筆者が聴講したセッションは主に2、6、7、8である。筆者が理解する限り、発表内容の概要は下記のようなものであった。

セッション2では主に韓国国内で出土したハンドアックスに関する年代論的・形態論的研究が発表された。Yi Seonbok氏は全谷里遺跡発掘調査後の韓国国内のハンドアックス研究史を概観した後、近年の研究からハンドアックスの継続年代が後期旧石器時代初頭まで下る可能性を示唆した。Lee Jungeun氏は臨津江-漢難江流域で出土するハンドアックスを3Dスキャン等による形態学的分析から分類した上で、ハンドアックスが最大長と最大幅の対比から、最大長の比率が高くなるものと、最大長比率が低くなるものでは、異なる変形過程を辿った可能性を示した。Yoo Yongwook氏はハンドアックスの平面・断面形態における左右対称性について演算処理的分析を行い、同一遺跡内で出土したものでも左右対称性について一定の傾向を持たないことから、ハンドアックスの製作には規則的な手順が存在しなかったと推定される旨を発表した。Bae Kidong氏はアフリカなどで出土するアシュール文化のハンドアックスと韓国国内で出土するハンドアックスの対比から、石器石材の性質が石器自体の形態に多大な影響を及ぼす点を指摘した。また、Derevianko Anatoly氏はユーラシア大陸内での両面加工石器の出土年代や、形態の類似性・差異性について発表を行った。Xie Guangmao氏は中国南部(広西壮族自治区百色)に所在する高嶺坡(Gaolingpo)遺跡で行われた近年の発掘調査の成果を説明し、本遺跡で確認された4つの文化層の内、3つが旧石器時代に属するものであった旨を発表した。

セッション6ではシベリア及び日本での近年の発掘調査等の成果が発表された。菊池強一・黒田篤史氏は岩手県金取遺跡の概要と、近年の発掘調査で出土した石器の出土層位が阿蘇4火山灰より下位に位置することから、これらの石器の出土年代が中期旧石器時代前半期に相当することを発表した。また、佐川正敏氏は金取遺跡と長野県竹佐中原遺跡で出土した石器が、石材選択などの観点から後期旧石器時代の石器とは異なる性質を持つものである旨を指摘した。Svoboda Jiri氏はシベリア北西部の遊牧民であるネネツ族の民族調査を基に、季節的な移動を行う集団の居住戦略に関わる要因が、複雑多岐にわたるものであることを示した。また、Derevianko Anatoly・

Drozдов Nicolay氏はシベリアに所在するアfontova Gora II)遺跡で2014年に行われた発掘調査の成果について報告した。

加えて、セッション6終了後には、金取遺跡出土石器の複製品及び採集品石器資料の展示が会場前で行われた。これらの石器に対する製作技術論的な見解や、年代測定や使用痕分析に関する検証方法についての質疑など、活発な議論が各国研究者によってなされていた。

セッション7では主に中国と韓国国内での考古学的・古生物学的研究に関する発表が行われた。Seong Chuntaek氏は大形剥片を素材とするハンドアックスに関する研究が従来過小評価されている点と、二項対立的な分類方法が適用されている点を批判した上で、地域別の石器石材の特質と選択が、ハンドアックスの形態組成に複雑な可変性を与えている点を指摘した。Zhu Min氏は中国東北部(遼寧省大連)の駱駝山金遠洞(Luotuo-shan Jinyuan-dong)遺跡で出土した動物骨について発表した。

セッション8では、主に後期旧石器時代における日本国内の黒曜石利用に関わる研究や、黒曜石とその他石材に関する使用痕研究の発表が行われた。小野昭氏は長野県広原湿原に展開する遺跡群の考古学的発掘調査による成果と、花粉分析等による古環境復原の結果から、和田峠産の黒曜石利用が、気候変動による森林限界域の変化と強い関連性がある点を指摘した。佐藤宏之氏は北海道内の遺跡で出土する黒曜石製石器を原産地別で概観し、これらの割合の変化が細石刃核の形態、更には石器石材の獲得戦略の変遷に対応する旨を発表した。出穂雅実氏は、北海道上幌内モイ遺跡での黒曜石製細石刃核の変形過程と原産地の分析から、当該遺跡が特定作業の場であった可能性を提示した。阿子島香氏は、



写真2 金取遺跡出土石器の資料展示

良質石材に対象が偏重していた従来の使用痕研究を再考した上で、「技術的組織」概念に基づいた、「粗雑な」石器石材も分析対象に含めた総合的理解の必要性を説いた。Chen Hong氏は、その質の粗悪さから使用痕研究が停滞していた石英製石器に対して実験考古学的分析を行った上で、内モンゴル自治区ウランムルン(Wulanmulun)遺跡出土の石英製石器が、動物の解体と木材加工に用いられた可能性が高い旨を発表した。大谷薫氏は、韓国国内の後期旧石器時代遺跡を石器組成別に4種類に区分した上で各カテゴリーの石材組成を概観したところ、石器石材への利用可能性と石材自体の質が、石器組成の発展に対して強い影響力があることが判明した旨を発表した。

**ポスターセッション** ポスターセッションは本会場前にて行われた。参加者は計2名であり、日本人では夏木大吾氏が参加した。夏木大吾氏のポスターは北海道吉井沢遺跡で出土した石器群の石器組成と空間分布に関する分析から、当該期人類の遺跡利用を復原する内容であった。ポスター発表のコアタイム等は特に設けられていなかったため、発表者は随時質疑に答えていた。

**エクスカージョン** 研究発表翌日にはエクスカージョンが生まれ、臨津江-漢難江流域の旧石器時代遺跡を訪れた。

踏査した遺跡は長山里(Jangsan-ri)遺跡、金坡里(Geumpa-ri)遺跡、佳月里・舟月里(Kawol-ri-Juwol-ri)遺跡、楠溪里(Namgye-ri)遺跡、全谷里(Cheongok-ri)遺跡である。これらの遺跡ではいずれもハンドアックスが発掘調査等によって確認されている。

各遺跡ではYi Seonbok氏らによる解説の後、その周囲を見て回った。また、楠溪里遺跡では高速道路建設に伴う緊急発掘調査が行われていたため、土層断面を観察することができた。

昼食後には韓国国内で初めてハンドアックスが出土した全谷里遺跡を訪れた。この際には遺跡公園内のガイダンス施設及び全谷里遺跡博物館を見学した。ガイダンス施設では当初設定されたトレンチと石器分布が復元されていたのに加え、韓国国内で初めて発見されたハンドアックス等が展示されていた。また、発掘調査の際に設定された水準点が、施設内の床面に当時の状態のまま残されているのを見ることができた。

博物館の外見は銀色の外装に流線型の形態という近代的な建築様式であったため初見は驚いたが、ア

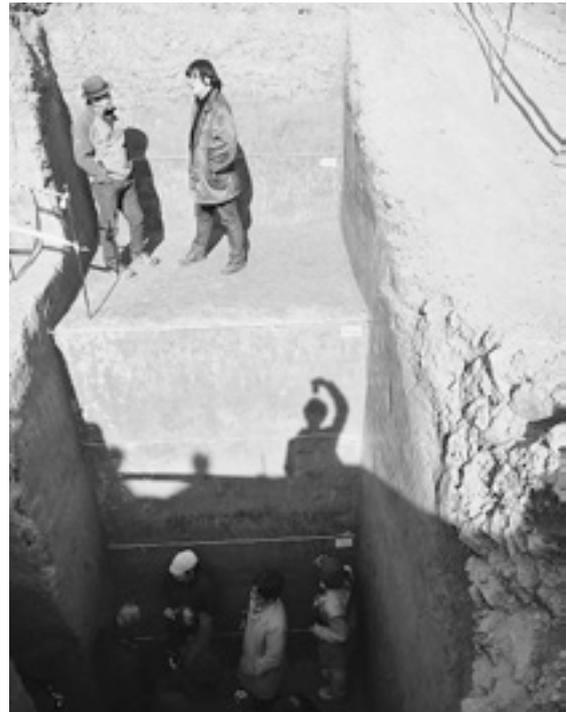


写真3 エクスカージョンの様子(楠溪里遺跡)

メーバなどの原生生物を想起させる形状に近代建築的な外装を採用することで、過去から未来への歴史的流れの中で博物館が機能しているというコンセプトを表しているということであった。館内はマンモスやオオツノジカ、人類進化に関する復原展示がある中に、2000年代の本遺跡の発掘調査において出土した石器や、土層断面の復元がその周囲に展示されていた。加えて、タンザニアで出土したアシュリアン期のハンドアックスや、ヨーロッパで出土した骨製品なども展示されていた。

**おわりに** 今回の大会に参加して一番印象的だったのは、東アジアにおける前・中期旧石器時代石器研究に対する各国研究者の姿勢であった。礫石器中心となるモヴィウス・ライン以東において存在する韓半島のハンドアックスに対して、その年代観や機能について積極的に検証していこうとする韓国研究者の意気込みを肌で感じた。列島内における前・中期旧石器時代の実態を論じるためには、後期旧石器時代の石器における石器製作技術や石材選択に対する理解だけでなく、東アジアを俯瞰するような、より包括的な範疇において理解することが必要であることを、今回の研究発表やエクスカージョンで韓半島の前・中期旧石器時代石器を見る中で痛感した。自身の研究が一遺跡、一地域内を対象にしたものであった場合でも、より広域な範囲で物事を捉える観点は常に持ち合わせるべきなのを実感した。

## 2013 年度日本旧石器学会賞 受賞者報告

ニューレター第 27 号で報告しましたとおり、2013 年度（第 1 回）学会賞に堤隆氏（浅間縄文ミュージアム）、2013 年度（第 1 回）奨励賞に中沢祐一氏（北海道大学）が決定しました。「選考理由」及び「受賞者の言葉」を報告します。

### 2013 年度学会賞：堤 隆氏（浅間縄文ミュージアム） 選考理由

堤隆氏は、長野県御代田町教育委員会に勤務し、浅間縄文ミュージアムの学芸員として研究・普及活動に携わっており、また長年にわたって八ヶ岳旧石器研究グループを主宰している。

堤氏の初期の研究では、相模野台地を中心にした有樋尖頭器の技術形態論や細石刃石核型式の層位的変遷など実証的な成果を積み重ねている。使用痕研究の分野では細石刃の観察からその機能と装着法に関する研究に先鞭をつけ、荒屋型彫器や搔器の使用痕研究を関連させて細石刃技術の解明や寒冷気候への適応行動の復元へと展開した。また堤氏は考古学的な問題設定と非破壊による多量の黒曜石産地推定を有機的に結びつけた初期の研究者の一人であり、相模野台地の細石刃石器群における黒曜石利用の実態を解明した。その成果は、中部・関東地方細石刃石器群における季節的標高移住を基底とした遊動・黒曜石獲得モデルの構築に示されている。

長野県野辺山高原の中ヶ原遺跡群の発掘調査を実施し、当該地への北方系細石刃石器群の到達を明らかにしたことに示されるように、堤氏の研究スタイルの根底には地域研究がある。同様に矢出川遺跡群の採集資料の記載を丹念に進めており、地域研究者の顕彰、後進の指導を含めて地域研究の発展に貢献している。また著名な神子柴遺跡の発掘調査報告書の刊行においては、中心的な役割を果たしてもいる。堤氏が主宰する八ヶ岳旧石器研究グループによる数々の細石刃石器群のシンポジウムは、資料の全国集成や列島の視野での研究推進に貢献している。

堤氏の研究の特色は、地域・遺跡研究に基礎をおいて具体的な課題を抽出し、丁寧な実証研究を通して課題をより広範な視野から体系化する点にある。これらの成果の一部は単著・共著の欧文論文となり、

海外への発信も積極的に行っている。また、社会的活動として多数の普及・啓蒙書の出版があり、講演会・シンポジウムなどの開催を通して旧石器時代研究の市民への認知度を高めるなど、堤氏は学界の地位向上に貢献している。このように堤氏の一連の研究活動は、日本旧石器学会賞にふさわしい業績であり、ここに推薦する。（日本旧石器学会賞選考委員長 島田和高）  
**受賞者の言葉（堤 隆）**

このたびは、栄誉ある日本旧石器学会賞をいただき、誠に有難うございました。

「マイクロひとすじに」。学部を卒業してから本年度 30 年になりますが、ひと言でいうとこれまでの自らの研究は、細石刃という小さな石器をただひたすら追いかけてきた年月なのかもしれません。私も、今では絶滅した人類である「考古ボーイ」のひとりであり、10 代前半、自宅のある信州佐久平から小海線にゆられて野辺山高原の矢出川遺跡を訪れ、初めて細石刃を採集しました。東海大学在学時には、矢出川遺跡群総合調査に参加を許され、以来明治大学の戸沢充則先生には「地域研究とは何か」をお教えいただきました。

卒業論文を相模野の細石刃で書くと、ふたたび故郷佐久にもどり行政で発掘に携わりながら、身近な野辺山高原をフィールドとして研究を続けて参りました。「この手で細石刃石器群を掘り出してみたい」。そんな願いから八ヶ岳旧石器研究グループの同志と中ヶ原 5B 遺跡、同 1G 遺跡において、矢出川とは異なる削片系細石刃石器群を発掘できたことは大きな喜びで、いくつかのシンポジウムで細石刃研究の現状の整理などを試みました。就職で閉ざされていた大学院への道ですが、國學院大学の小林達雄先生のお導きによって社会人として博士課程へと進学し、40 歳の折、細石刃石器群研究により学位をいただくことができました。

細石刃という石器は、冷たい研究材料というよりは、少し気恥かしい表現ですが、最初に手にした時からさまざまな希望や出会いを私に与えて続けてくれているいわば「魔法の石」です。今回の受賞を契機に、細石刃とそれを携えたハンターの姿をさらに追い求める研究を持続したいと考えております。

### 2013 年度奨励賞：中沢祐一氏（北海道大学）

#### 選考理由

中沢氏による「携帯性石刃石器の効用－パッチ利用モデルと石器消費の接点を探る－」（『旧石器研究

第7号』は、先史狩猟採集民による資源パッチにおける生産率の最適化と石器消費（消耗・廃棄）の相関を明らかにする方法論を構築するために、行動生態学のパッチ利用モデルを前提として採食理論の一つである限界効用定理モデルを準備し、最終氷期最寒冷期にあたる北海道川西C遺跡石刃石器群のスクレイパー類がどの程度消耗した状態にあるのか定量分析を行って両者を比較している。その結果、川西C遺跡では、パッチ利用の最適化以前の段階で素材表面積の20%程度が消耗した多数の石器が連続的に廃棄されていることが示唆された。

また、「廃棄物形成からみた居住活動の組織化－北海道川西C遺跡 En-a 降下軽石層下位の居住面について－」（『旧石器研究第9号』）は、先述した論文と同様に川西C遺跡の資料を用いているが遺物の空間分布を対象としている。居住強度という概念を利用し、遺跡の空間利用の変化を明らかにする方法論の構築に取り組んでいる。サイズ・ソーティングされた遺物と被熱石器の分布を炉跡との関係において解析し、一次廃棄と二次廃棄の弁別および居住強度の遺物集中部間の強弱の算定に基づいて特定の遺物集中部に集約されていく空間利用の変遷を復元している。これら一連の論文は、帰納的研究における仮定、仮説等のあいまいさを避けるために、一般理論やモデルを援用し、それらを実際の石器分析からテストする方法論を構築することの重要性を示す優れた論文であり、日本旧石器学会奨励賞に値すると判断される。（日本旧石器学会賞選考委員長 島田和高）  
**受賞者の言葉（中沢祐一）**

このたびは第1回日本旧石器学会奨励賞を賜り大変光栄に存じます。方法論に関心があった私は、研究者を志し北海道へ渡った後、ニューメキシコで人類学的考古学を学ぶ機会を得ました。渡米時は捏造事件を契機に検証や基準などの言葉が頻出し、考古学は科学的なのだろうかという漠とした疑問を抱いていたように思います。やがて知った人類学的考古学は調査課題に取り組むための理論、モデル、仮説、方法、データ、説明までが一連であり、確かな言明の構築に至る手続きが問われる世界でした。この基準の達成は今も私の目標ですが、博士論文提出後は仕事の確保という現実に直面し研究内容を見直すこともありませんでした。閉塞感にとらわれつつも、精根尽き果てる前にせめて目指す方向を示そうという境地に至り、幸いにも『旧石器研究』に拙論をまとめさせていただくことができました。た

だし私の議論は川西C遺跡の綿密な発掘調査成果が基にあり、調査を担当された北沢実氏と山原敏朗氏のご理解なくしては成しえませんでした。両氏へ厚く御礼するとともに、ご評価をいただいた日本旧石器学会の皆様、これまで御薫陶を下された先生方、先学諸氏、同志、家族に感謝したいと思います。受賞に対して手放しで満足することなく、自らの議論が科学的基準を満たすように精進していきたいと思っております。

## 2014年度日本旧石器学会 普及講演会開催報告

今年度の普及講演会の1回目は、2014年10月12日（日）に、大阪歴史博物館で開催しました。共催として島根県古代文化センター、隠岐ジオパーク推進協議会にも入っていただき、PRも広く出来たおかげで、会場ほぼ満員の200名以上のお客様をお迎えすることが出来ました。隠岐ジオパーク推進協議会からは、お土産として隠岐の黒曜石を提供いただき、実際の黒曜石を触ってみたいも出来ました。

当日の内容は以下の通りです。

- 講演： 絹川一徳（日本旧石器学会会誌委員長）  
「二上山のサヌカイトと旧石器文化」  
丹羽野 裕（日本旧石器学会広報委員長）  
「隠岐の黒曜石とその広がり」

○ミニ対談： 絹川一徳、丹羽野 裕

絹川氏は、旧石器時代の概説をした上で、二上山のサヌカイトの特性やそこから生まれた瀬戸内技法の特色などを解説されました。また近畿地方での石器群の特徴や古地形の分析から、この地域での遊動のあり方などにも言及され、普段なじみの少ない地元の旧石器時代の様子に、参加者も興味をひかれておられたようです。

丹羽野は、隠岐が世界ジオパークに認定されたことを受け、隠岐の地質と黒曜石の特徴からひもとき、それが旧石器時代に山口県から関西にまで広がっていることを解説。五色台のサヌカイトや出雲の玉髄なども含めて、石材からみた中国地方での遊動のあり方について話しました。現在調査中の久見高丸遺跡での黒曜石の産状の写真には皆さんが興味深く見入られておられたようです。

ミニ対談では、あらためて瀬戸内技法など、旧石器時代の遊動の中で石材の特性に合わせて特殊化した「スゴワザ」を議論し、原産地や石材が当時の生活の

中で重要な役割を果たしていたことを話し合いました。

これからもなるべく多くの皆さんに、旧石器時代の研究状況などをお知らせできるよう、普及講演会を続けるとともに、そのあり方の検討も進めていきたいと思えます。(丹羽野裕)



写真1 大阪講演会 会場の様子

2014年10月25日(土)、東京都埋蔵文化財センターにて日本旧石器学会第2回普及講演会が開催された。講演会参加者は37名、幅広い年齢層の一般参加者が多くを占めた。要項は以下のとおりである。主催：日本旧石器学会・明治大学黒曜石研究センター

○第1部(14:00-15:00)：第1回日本旧石器学会賞受賞記念講演「氷河時代の狩猟採集民 - 列島最古の現生人類はどう生き抜いたか -」堤 隆

○第2部(15:15-16:00)：トークセッション「日本列島の旧石器時代」佐藤宏之(日本旧石器学会会長)×伊藤健(日本旧石器学会総務委員長)×堤 隆

堤氏の講演内容は次の5項目で構成される。1：われわれはいつ日本列島にたどり着いたか？(約4万年前・3つのルート・日本列島の旧石器時代遺跡・その素顔)、2：いかなる環境下に生きていたのか？(アイスコアから・最終氷期・絶滅動物・海面低下・寒冷環境の生存戦略)、3：どんな方法で食料を得て



写真2 東京講演会 堤氏の講演と会場の様子

いたのか？(狩猟と採集・陥し穴猟・槍猟・狩猟用石器・漁労は?)、4：必要な資源をどのように開採し調達していたのか？(黒曜石・産地(神津島産・伊豆箱根・和田峠・高原山)・最古の航海のナゾ)、5：どんな集団や社会を形成し生活していたのか？(発見されない住居跡・環状ブロック群・遊動生活)。

内容は列島の旧石器時代の概要が簡潔に凝縮されたものであった。サキタリ洞遺跡など最新情報や、堤氏が蓄積してきた関東周辺の黒曜石研究なども盛り込まれていた。旧石器人の復元模型の比較や、神津島へ渡る舟を漕ぐ復元図の説明など写真やイラストが多く使用され、一般参加者にはとても解りやすいものであったと思われる。

第2部、トークセッション「日本列島の旧石器時代」では堤氏の講演を基調に、佐藤氏により列島最古段階の遺跡と年代、陥し穴猟と対象獣、伊藤氏により居住形態と人口論等が語られた。会場からの質問では石斧の用途は何か？、陥し穴は何で掘削したか？、なぜ陥し穴の分布が偏るか？等が出され、参加者の関心の高さが窺えた。今回の普及講演会によって参加者は氷河時代の列島の狩猟採集民がどう生き抜いたかを具体的にイメージできたのではないだろうか。

(山田和史)



写真3 東京講演会 トークセッションの様子

## 学会賞の推薦について(再募集)

学会では、日本旧石器学会賞を定めました。ニューズレター第27号にて学会賞受賞候補の推薦を募りましたが、改めて再募集します。旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員を推薦してください。

1. 推薦内容 学会賞受賞候補
2. 推薦期間 2015年1月20日(火)～2015年2月15日(日)(必着)

3. 推薦者の資格 日本旧石器学会員

4. 推薦方法

・学会賞受賞候補の氏名、学会賞受賞候補の推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局あてに送付して下さい。

5. 注意事項

・推薦は自薦・他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。

・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限りません。推薦にあたって、学会賞受賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。

・推薦の書式は自由です。

・推薦理由は概ね 100 字から 300 字にまとめてください。

6. 応募先・照会先

日本旧石器学会事務局（担当：伊藤健・山岡拓也）  
〒422-8529

静岡県静岡市駿河区大谷 836 静岡大学人文社会科学部社会科学山岡拓也研究室

電子メール jpra\_2003@ay.em-net.ne.jp

### 九州旧石器文化研究会第40回記念大会

九州旧石器時代の人類文化と遺跡群の成り立ち  
－石器組成・技術・石材・遺構からみた九州旧石器文化の特質－

九州旧石器文化研究会第40回記念大会は、2014年9月13日（土）・14日（日）の両日、熊本県熊本市の熊本市国際交流会館で開催された。

40回という節目に、これまで蓄積された成果を遺跡群という視点から捉え直し、九州旧石器文化の特質を見出すことを目的とした。内容は以下のとおりである。

2014年9月13日（土）13：00～17：30

記念講演 橘 昌信「九州旧石器時代研究の展望」  
基調報告 山崎真治「琉球列島の旧石器人とその文化」

〔第1部 九州島の遺跡群をめぐる諸問題〕

問題提起 杉原敏之「九州島における遺跡群研究の課題」

発表1 藤木 聡「九州島の石刃技法と遺跡群」

発表2 鎌田洋昭「石材資源と人類活動」

発表3 松本 茂「石器群からみた遺跡群形成」

9月14日（日）9：10～15：00

〔第2部 始良火山噴火後の九州における遺跡群の成り立ち〕

発表1 馬籠亮道「南九州の遺跡群」

発表2 秋成雅博「宮崎平野の遺跡群」

発表3 沖野 誠「大野川流域と五ヶ瀬川流域の遺跡群」

発表4 岩谷史記「阿蘇外輪山周辺の遺跡群」

発表5 辻田直人「島原半島・百花台遺跡群」

発表6 越知睦和「上場台地と遺跡群」

コメント 荻 幸二「九州島の諸事情から」

討論会「九州旧石器時代の人類文化と遺跡群の成り立ち」

司会 村崎孝宏・杉原敏之

1日目は記念講演と基調報告、研究発表を行った。また、資料見学も随時行った。記念講演では橘昌信先生に研究会の歩みをお話し頂き、地域性のルーツやその様相を探る方法が示された。基調報告では山崎真治氏に現生人類の南回りルートである琉球列島を中心に東南アジアの研究状況と、各地の文化的様相を発表頂いた。

第1部では、遺跡群をテーマとする趣旨やAT降灰前後の様相について、各視点から発表が行われた。

技術・石材・遺跡群という視点から各氏は九州全体の流れを提示された。その中で特に、西北九州における剥片尖頭器の流入・南下の様相や、肉眼観察による石材鑑定の限界と課題、AT降灰後の遺跡数増加の背景や立地・分布、さらに人口論まで触れた点は評価される。

2日目は、第2部：各地域の遺跡群について6本の研究発表とコメント・討論会が行われた。各地域の発表では、共通性より地域性が際立った。西北九州の黒曜石、東九州の流紋岩、宮崎平野の砂岩・頁岩・ホルンフェルス、南九州の多様な石材、といった各地の石材環境が確認され、そこから主に西北九州産



写真1 九州旧石器文化研究会 大会風景

の黒曜石が遠隔地石材として他地域に搬入されている状況が見えてきた。また、宮崎平野や南九州では、遺跡群の展開を時期別に示し、原産地と消費地遺跡の関係（遊動スタイル）等を検討した。

西北九州からは、雲仙の百花台遺跡群と唐津の上場台地を取上げ、主要石材である黒曜石の利用状況や、その黒曜石と強く結びついた石器製作技術が提示された。土層堆積が薄い地域にあって、貴重な層位的検出事例である百花台遺跡群において、詳細な石器群の検討結果から、AT降灰前後における石器群の変遷が捉えられたことは大きな成果である。

これらの発表に対して、周辺地域からの視点として北浩明氏、沖野実氏、須藤隆司氏にコメントを頂いた。

討論会では、AT降灰前後を時間軸に沿って、九州各地における石器組成や石材、技術、遊動領域等の特徴や変遷と、それらの共通性・相違性について議論した。種々の課題はあるが、始良火山の爆発による大規模災害から、九州の人類がどのように復興し遺跡群を形成していったのかという、当初のテーマは昇華出来たのではないかと思う。詳しくは本会機関誌『九州旧石器』第18号を参照されたい。

なお、次回の第41回大会は福岡県で開催する予定である。HP「ハカタントロプス」でも情報を掲載しているので、そちらも是非参照して頂きたい。（越知睦和）

## お知らせ

### 日本旧石器学会研究グループの募集

本学会では、旧石器考古学およびこれに関連する研究課題について国内・国外の情報を交換し研究することを目的として、研究グループを設置しています。その「内規」には自由に研究を行うことができる上、運営費を補助することも盛り込まれております。

つきましては2015年度の日本旧石器学会研究グループを募集します。研究グループの発足を希望する会員は、グループ名、代表者名、連絡先、研究目的、活動予定期間、参加者数、運営費交付希望の有無などを記入して本学会事務局に応募してください。募集期間は2015年3月31日まで。応募・問い合わせ先は、事務局へ電子メールまたは郵送でお願いします。

来期は、現在の「研究グループ」の全てが満期を迎えますので、新規応募のチャンスです。

### 2015年度 総会研究発表・ポスターセッション発表の募集

2015年6月20・21日に宮城県仙台市、東北大学片平キャンパス片平さくらホールで開催される総会での研究発表・ポスターセッション発表を募集します。詳しくは追って、日本旧石器学会HPにおいて掲載しますので、奮ってご応募ください。

### 会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただきます。会費未納の方々につきましては、速やかに所定の会費の納入手続きをなされますようお願いいたします。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。

なお転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、当会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

### メーリングリストの運用について

メーリングリストの運用を行っています。これは、学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものです。ただ、運用から1年がたちましたがまだ会員の3割の方しか登録していません。まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストに御登録ください。メールアドレスを、総務委員の山岡のメールアドレス(takuyayamaoka@yahoo.co.jp)までお知らせください。速やかに御利用できるようにします。強制するものではありませんが、御協力をお願い申し上げます。

日本旧石器学会ニュースレター 第28号

2014年12月25日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

高倉 純・氏家敏之・笹原芳郎

藤野次史・野口 淳

発行：日本旧石器学会

事務局：〒422-8529 静岡県駿河区大谷836

静岡大学人文社会科学部社会学科山岡拓也

研究室

E-mail jpra\_2003@ay.em-net.ne.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>